

## Info&Report 編 副読本改訂委員会

10月24日(火)に今年度最後となる「第4回 副読本改訂委員会」を行いました。1回目 6月20日(火) 2回目、3回目は8月に、そして今回です。(写真は6月20日(火)の第1回のもの)

社会科の学習に用いる副読本を、滑川市はこれまでも数多く作成しています。現在使われているのは次の5冊です。

- ①のびゆくきょうど滑川 (小3対象)
- ②郷土滑川のあゆみ (中1対象)
- ③なめりかわのジオパーク (小4対象)
- ④室山野・東福寺野の台地をひらく (小4対象)
- ⑤滑川市の姿 (中1対象)

副読本は概ね5年ごとに改訂をし、印刷製本して配布してきました。ですが、一人一台端末を持つことから、紙ではなく電子書籍で配布してはどうかと考え、昨年度より改訂の折にPDF文書に作り直しています。これにより「資料をカラーで大きくしてみることが出来る」「読み上げ機能が使える」「本を持ち歩かなくて済む」、「無くさなくて済む」「印刷製本費用がかからない」などの利点があります。

今年度は上記の①②③の改訂を行いました。(昨年度は⑤を改訂しました)

改訂作業として行うのは、資料やデータを最新のものに差し替えたり、子どもたちの実態に合わせてルビを振り直したり、また文章に新たな項目を加えたり、古くなった写真などを改めて撮り直したりしました。今回PDF化に合わせて、A5サイズやホームページ形式であったものをすべてA4サイズに揃え、閲覧・印刷しやすくなりました。



また、写真や資料の持ち主に今一度問合せ、紙媒体ではなく電子媒体でも掲載して良いかを委員の先生方に確認していただきました。もし許可が下りなかった場合は、掲載しないか、画質を落として複製しづらくして掲載することになっています。

第4回の今回で、おおよその作業は終了しました。このあとは、教育長の挨拶文を掲載し、センターと教育委員会で内容の最終確認をしてPDF化、目次と本文にリンクを付け、全文検索ができるように体裁を整えます。年度末に電子書籍となった3冊の副読本を子どもたちに届ける予定です。

# 今年度改訂中(PDF化)の副読本の一部

**のびゆくきょうと滑川 全体もくじ**

この本には、滑川市でくらす人びとの生活やそれを変えている人びとのしごとのことがあつちりしようがたくさん入っています。  
自分の生活とどのようにかかわっているか、調べてみましょう。

<b>1 わたしたちのまち みんなのまち</b>	<b>第1章へ</b>	
(1)市のようす (2)学校のまわりのようす		
<b>2 滑川市の人々のしごと</b>	<b>第2章へ</b>	
(1)人びとのくらしとお店のしごと (2)人々のくらしと工場 <small>のしごと</small> (3)人々のくらしと農家のしごと (4)人々のくらしと漁 <small>のしごと</small>		
<b>3 くらしを守る</b>	<b>第3章へ</b>	
(1)災害がおきたら (2)事件や事故がおきたら		
<b>4 住みよいくらし</b>	<b>第4章へ</b>	
(1)ごみのしまつと利用 (2)くらしをささえる水 (3)くらしをささえる電気		
<b>5 むかしのくらし</b>	<b>第5章へ</b>	

	はたらいかミュージアム ホテルイカや海の生き物について見たり調べたりできます。
	滑川漁港 春には、ホテルイカ道が有名です。
	いなほのこ 櫻原神社 毎年6月には祭礼が

新・滑川のありか



なめりかわのジオパーク

～大地・川・海、歴史がおりなす自然と文化～

2024 PDF版






滑川市教育委員会

## 第1章 滑川の地勢

### 生まれた滑川の自然

群馬に富士山、水平線上に北見の山並みや雄略平泉、管理にはゆき野々の雪を見せて、常に私たちを見つめている雄大な磐梯や立山連山の麓に抱かれ、その間に広々と展開する風光明媚な緑豊かな緑野の地帯、これが私たちの生まれた大地である。滑川はこのように生まれた大自然の中で生まれ、今日まで発展の道をたどってきた。

滑川市の総面積は約5,462ヘクタール、そのうち山地が41パーセント、森林が約18パーセントである。富士山は標高が3,776メートル、森林が67パーセントであるのに対して、滑川市は山地が多くは約約5割であるというべきであろう。西に上市川が北西方向に流れて富士山に注ぎ、その間の多くの小川や用水等による灌漑で、農業生産をはじめ、さまざまな生活活動が見えられてきた。

**滑川市の地勢**

滑川市の地域は、早月川の中流扇形地を基として、北方に向かって扇形に広がったように広がる扇状地に立地している。山のふもとには富士山麓地域の多河川の流路に共通した扇状地がみられ、それより下流の低地には早月川の新扇状地が発達し、その流域ではほとんどが形成されることなく、たがいに海に臨んで扇が河川まで覆ばれている。

山麓部に発達する扇状地は、早月川やその支流の高川、細川などによって形成され、さらに地殻変動で地盤が隆起して出来たものと思われる。この扇状地は、その末端である大滝、大滝野の地域で最も狭く、扇状地は20メートルから30メートルの高さの違いを見せる早月川扇状地となっている。

この後、扇より北の方に広がる低地が早月川によって作られた扇状地である。昔から早月川はたいへん暴れ川で、洪水のたびに流路が変わり、あちこちで土砂を堆積し扇状地を形成してきた。かつて早月川の河原が扇状地のほぼ中央を貫通していたことは、滑川漁港付近の埋蔵地層に河原が存在していることから立証されている。扇状地が削られて、早月川が現在のような河川になって扇状地の動きが止まったのは、近世になってからである。

## 1. 大伴家持歌碑

魚沼市山ノ内町の魚沼総合公園内に設置されている「大伴家持歌碑」には、次のような歌がぎざぎざされています。

「立山の 貴し洲らしも 嵐嶺(早月)の 列の渡り橋 雲つかずも」  
(立山の雲が舞っているらしい。だから、早月の渡り橋で、水雲が舞って雲は風雨までつかずもどかす。)

これは、日本最古の和歌集「万葉集」に出てくる歌で、奈良時代の貴族・歌人であった大伴家持がよんだもので、早月川に関する最古の記録です。家持が越中国内として越中国内を見回りに出て、あつて早月川を渡ったときによんだものとされており、早月川の激湍で、水雲が増して早月川は急流で、雲雨時水が一気に横切るので、舟具まで川の水に浸かってしまったという歌の内容から、早月川の水の勢いのすさまじさが感じられます。

## 2. マンドウサマ(水神様)

早月川は、これまでに何度も洪水をひき起こしてきたため、災害地では洪水で流されてきた石などを水神様としてまつています。滑川市では、この水神様を「マンドウサマ」と呼び、市内13か所で見ることができます。

